

火星



平成17年3月号

七曜抄 二

山尾玉藻

マフラーのぐるぐる巻きが訃を告げに

紅梅の下紅梅の束ねあり

柊を挿せる大和に遊びけり

三極の雨降りながら花ざかり

ひんがしの風に立ちたる蓬ぐさ

野蒜摘むつめたき遊びしたりけり

うぐひすやきのふ落石ありし山

バナナ籠据ゑ誰もぬ春炬燵

朝桜船頭小屋へ吹雪きけり

花屑を溜めてけものの穴らしき

太白星

柳生千枝子

汐騒や冬木は星をちりばめて
自我目覚めたる年頃や日記買ふ
襖閉づ父の怒りの心外な
枯れ庭にふらここ錆の音たつる
紅葉濃し口数減りし句友達
金色に聖樹灯りて夜空の紺
自然林出て歳末の町ありぬ

杉浦典子

階段を上がつてゆけばクリスマス
クリスマスカード立ちをり空の青

枇杷の花空の人力車が走る
闇汁会果ててひとりの足らぬなり
鮫鱈の口に朝日の届きをり
梟の啼きたる腓返りかな
おはやうのこゑ冬菊に紅さして

浜口高子

碧潭に枝を浸せる冬紅葉
返り花鶺籠きちんと積まれあり
鳥屋に鶺の咽鳴らせる小春かな
慈善鍋の中の日暮を覗きけり
南座を比叡風と素通りす
砂利川を渡つて来たり葉喰
日のぬくみと摘む冬苺一周忌

火星作品

山尾玉藻選

水仙の咲きはじめたる夜空かな
幼な子と一枚づつの落葉焚
てのひらに冬の木の実の赤すぎる
大根の首痒さうに育ちけり
いつしんに靈気やしなふ竜の玉
割りし竹大晦へ飛びにけり
諸がゆの湯気の中なる奥目なり
オリオンや街路樹の瘤太るまま
霜晴の天よりコンクリ流し込む
鹿ジャーク食みて枯野を駆けめぐる
かき舟の昼の障子のなんともなし
重ね着の父の胸より一封書
姉小路の師走表具屋柚みそ屋

明石 戸栗 末廣
川西 高橋 芳子
宝塚 山本 耀子

毛布より出す手を握り別れきし
二坪の畑つ物抜く年忘れ
頤を残し凍星流れけり
松ぼくりまみれの枝や冬ざる
着ぶくれて鏡に物を申しをる
芋粥の煮ゆる座敷へ通されし
尾根越えて枯葉の匂ふ日差かな
臘梅の道のさびしき真昼かな
寒肥や一番星と二番星
抽出にぢぢばばのこゑ箱火鉢
革ジャンも同じところで躓けり
またたれか大根を洗ふ川の音
土日が何となく邪魔年の暮
ふぐなまこ喰はずに生きて卒寿かな
知られ度い知られ度くない竜の玉
湯たんぽの朝の加減でありにけり
とんどする隣の兄ちやん一寸好き

宝塚
河崎
尚子

兵庫
田中
英子

大阪
加藤
君子

選のあとに

山尾 玉藻

う。その風雅さに比べ昼の牡蠣舟はいかにも淋しい。屋形船の屋根が一層淋しさを募らせるのである。

幼な子と一枚づつの落葉焚

戸栗 末廣

松ぼくりまみれの枝や冬ざるる

河崎 尚子

頭の中だけでは作られそうで作られない句、体験によつて成つた作品だからである。「幼な子」はお孫さんの事、孫俳句に良い作品がないと言われるが孫俳句そのものが悪い筈はない。常識に陥るのが悪いのである。掲句の「幼な子」という言葉にもひと工夫がある。「一枚づつ」が格別に良い。

霜晴の天よりコンクリ流し込む

高橋 芳子

湯たんぼの朝の加減でありにけり

加藤 君子

大きな工事現場を想像しなくても身近に見える小さなビルのコンクリー打ちで構わない。「天より」に飛躍があり成功した句である。同時作〈割りし竹大晦へ飛びにけり〉も佳句。この句も竹が大晦日へ飛んだと言う飛躍が良い。この作者は作句の上で大きな壁を突き破りひとまわり成長されたようだ。

かき舟の昼の障子のなんともなし

山本 耀子

「朝の加減でありにけり」は大方の人が体験で知っている事。宵の口は熱過ぎる程でないと湯たんぼの役目は果さず、明け方の寒さの厳しい頃にぬるめ程よくなる。平凡で見逃されそうだが湯たんぼと言う季語の有り様に迫っている。また、〈ゆたんぼと二階へ上がる母の音 嘩子〉も佳句である。(以下略)

下五の「なんともなし」の字余りに賛否両論があろうが、この俳諧味を良しとした。「なんともなし」は勿論なんともあるのである。作者は夜の牡蠣舟に乗られた事があるのであ

恒星圈

同人 I

大山文子

食堂の闇に慣れ来し風邪心地
竹生島の下くぐり来しかいつぶり
退職の夫に茶の花真盛り
極月のくぐりし小さき仁王門
鬱の人鬱を語りし冬の月

岡和絵

飯塚ゑ子

年惜しむ炎柱高き鉋屑
冬草をかき分けてゐる鶏冠かな
臘梅に翻りゐる由来札
霜晴や残らず燃やす木挽屑
大綿の宙返りける貴船川

臘梅やおつかひ物を平包み
冬灯瓶につめある古切手
歳晩の茶房に流るビールズ
高野道のかかり冬菊匂ひけり
浄め塩肩より払ふ冬紅葉

伊藤多恵子

奥田節子

検診の日を早起きす冬たんぽぽ
ひと鉢の梅を賜はる空の晴
採血のありたる腕の菊焚けり
実南天夫ネクタイをきゆつと締め
来年の在る水仙を活けにけり

冬至来る庄屋の太き柱かげ
石路の黄に火伏の祠なほ幽き
水涸のくねりくねりて草臥れし
馬街道もとの聖樹に戻りたる
街道の夜へ聖樹と常夜燈

